

## ヒグマの子育て

前田 菜穂子

日本には、本州にツキノワグマ、北海道にヒグマと、2種類のクマが生息している。

私の勤務しているのぼりべつクマ牧場には、そのうち北海道のヒグマばかり、約二〇〇頭が飼育されていて、毎年三〇〜四〇頭の子グマが生まれ育っている。ここには、産室という野生のヒグマが冬ごもりをし、その間に子を生み育てる穴に似せて作った個室があり、そこで毎年ヒグマの出産と子育てが繰り返される。

クマ牧場に勤めてちょうど一〇年。一〇回の出産と子

育に立ち会って、ヒグマ達から教えてもらったことを、皆様にお伝えしましょう。

ヒグマは普通、根雪になる一月中旬〜下旬に土穴や木のウロ、岩などに冬ごもりのための穴を、前肢の長さ(二二〜二三cm)鋭いツメを使い主に土に自分で穴を掘りその中で春まで冬ごもりをする。秋に実った、コクワ、ヤマブドウ、ドングリ、ナナカマドなど木の実や昆虫などで食いだめをして、皮下脂肪が七〜八cmにも厚く付き、十分日光浴をした後、四日間ほど絶食状態を過し



▲生後一日目の母グマと子グマ

て、胃や腸をすっきりきれいにして冬ごもりに入る。

全く飲まず食わずで、最も寒い大寒の頃（一月下旬）に一〜二頭の子グマを出産する。

交尾は六月だから二一〇〜二二〇日の妊娠期間があるのだが、その子グマは想像以上に小さい。体重四〇〇g、体長二五cmしかなく、目は閉じ、耳は毛のない皮膚に覆われていて穴もない。毛はネズミのように短く、首も足腰も座らず立つことが出来ない。人間より未熟な状態で生まれる。

顔じゅうが口と鼻というように、生まれたての子グマはヒグマの特徴を私達に誇大に見せてくれる。それは発達した鼻と鋭いツメで、将来の最大の命をつなぐ重要な器官を示しているし、まだ歩けない体を引きずってツメで母グマの胸をよじ登り、独力で乳を飲み、強力なその吸う力で体をささえる。

母グマの出産は、子が小さいので軽いと思われがちだが、やはり大変のようだ。体をまるめ、かなりいきむ。四肢で立って中腰になり、お産が始まると子グマ以外はすべて次々ときれいに食べてしまう。お産前に作ったワラの巣には、血痕一つ残らず、子グマもきれいになめ、誠に美事と言う他はない。

出産後すぐに母グマは、子グマを胸と腹の間に抱きかかえ、約一週間位は、ほとんど身動もせずじっと寝ている。子グマは、少しでも母グマから体が離れると火が付いたようにギャーギャーとなく。母グマは、子グマの排便をさせる時以外はひたすらじっと子グマをしっかりと抱いて寝る。授乳間隔は、人間とほぼ同じ、三時間おき

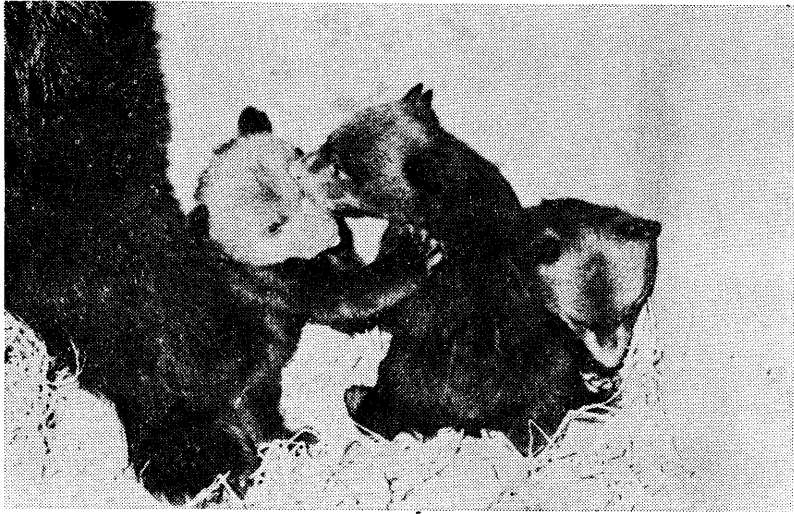
に、子がなき、自力で乳房の所にはって行き、ツメでよじ登って吸い付く。母グマは、寢息やイビキをかいていゝる事があるほどだから、このへんが人間と異なる。子グマは未発達の割に独力で行く。

子グマの排尿便は、特に生後一週間―二週間までは、母グマが、お尻をなめてやらないと出来ない。なめる事による刺激によつてはじめて行くことが出来るので、人工哺育の場合も暖かい湯でマッサージをする。母グマは子の糞尿をすべて食べてしまうので、穴の中は春まで誠にきれいで乾燥している。勿論母グマは飲まず食わずで子育てを行うから、その間お乳は出すが、一斉排出はしない。この生命力の秘密、からくりはどうなっているのか、私達の最大の研究テーマの一つである。省エネルギーと言われて久しいが、いつも、ヒグマに接するとこの事を思い知らされる。

目も閉じ、耳も閉じ、首も座らず、四肢も立てなかつた子グマも、生後四五日目頃から、それぞれの感覚器や、運動が発達してきて、ほぼこのあたりから全体的に

一つの節目を迎える。三時間ごとに、ないては、おっぱいを飲み、ねむる、という生活から、少しずつ動き出し冬ごもりを終えて、春、母グマと共に穴から出る準備が始まる。まず耳は、初めしわが出来、その後そこから皮膚が落ち込みはじめて、穴があく。耳介に毛が生え出し、音によつて動き、反応し出した事がわかる。目は、少しずつ開き出し、はじめは膜がかかつていて、ちょうど日光のように神秘的な光をたたえているが、膜がとれると、瞳が輝き動く物に特に注目するようになる。

首が座り、四肢で立つようになった後、はいはいから、よたよたと歩行をしはじめるのは、生後二ヶ月たつてからだ。驚いた事に、四肢で立てるようになる前から、動くものに対してはいはいをしながら前肢を振りあげる反射がみられた。よく言われる、ヒグマの前肢の一撃のパワーの凄さをみせつけられる。よく、牛や馬などの首の骨すら折ってしまうと言うこのヒグマの前肢の威力と瞬発力の速さは有名だが、これは、反射運動と言ってもよく、すでに生後一ヶ月を過ぎると歩行よりも早く



▲ 生後 60 日 目

に現われるのだ。

歯は、針の先のような乳歯がやはり四五日目頃から、犬歯や門歯から出て、ちょうど離乳する六月までには、乳歯がすっかりそろう。運動も、徐々に活発になり、授乳間隔も開いてくる。生後二ヶ月もすると、子グマは母グマにじゃれ付いたり、兄弟がいれば、レスリングやすもうをしたり、母グマもおちおち寝てはいられなくなる。奥行三m幅一m足らず、二m以上も深い雪の中に埋もれた、小さな真暗な土穴の中で、体重二〇〇kg、体長一m八〇cmもある巨大な母グマと、小さな小さな子グマの出産と子育ての営みが、春まで繰り広げられる。

四月上旬と中旬、いよいよ冬ごもりを終え、日の光のもと外界に出る日がやって来る。その頃の子グマは、生まれた時のちょうど一〇倍、四kg程に成長し、まだ少々よたつく足取りであるが、母グマの後から十分ついて行く事が出来るまでになっている。

まだ母乳が中心だが、乳歯もはえて来ている。五月に入って、フキノトウや、ザゼンソウなどが沢地に芽を出

した草の芽や根など、少しずつ体をならしながら食べて行く母グマのまねをして、口に含んでみたり、じゃれてみたりして、覚えて行くようだ。六月に入ると乳歯がすべてはえそろう。山では、若葉が出てちょうど草は食べ頃となる。誠につよく出来ている。この頃には、離乳も完成しているので、母グマは毅然とした態度をとる。

一日、二―三回、授乳をする時は、子グマを十分に甘えさせ、じっくりと十分に乳をやりなめたりかわいがらる。しかし、子グマが、勝手に飲ませると、まとわりつき、せがんだりする時は、容赦なく突き飛ばす。ひどい時には、前肢で三―四mもポーンと突き子グマは飛んで行ったほどである。やらない時は、絶対子グマがどんなに甘えても突き離すのだ。授乳回数を段々と減らして行くが、冬になって雪がまい降りる頃でも授乳している姿を目にする。これは、栄養をとるといふより、母グマと子グマのきずなを深める心理的な作用の方が強い様に思えるのだが。野生のヒグマの場合は、再び、この母子は、共に冬ごもりをする。ヒグマの場合、研究が進むに

従って、かなり個体差や、その時によって、子別れの時期は、様々の様子であることがわかってきた。一般には、二回、母グマと共に冬ごもりをした後、六月の発情期に子別れをすると言われてきたが、満二歳、時には三歳になって親と分かれる場合も報告されている。

飼育下では、満二歳の六月で妊娠し、満三歳で子グマを生む個体が半数近くいる。一般には、満三歳で妊娠し四歳で初めて子を生むと言われているが、これも、一年や二年のズレが個体によってあるようだ。

クマ牧場の場合、初めてのお産は、ほとんどの母グマは失敗してしまう。子を育てることが出来ず食べてしまいう母グマが多い。しかし、二回目、三回目と経験を重ねることによって、子を上手に育てる。八歳―九歳が女ざかりと言つてよく、子も栄養状態もよく、良く育てる。高齡になると子は小さいようだ。

子育ては、ヒグマもやっぱり経験が大切なんだと、私自身力づけられたことである。

(のほりべつクマ牧場・飼育課)